

図書館が変われば大学は変わる

有川, 節夫
九州大学附属図書 : 館長

<https://hdl.handle.net/2324/7666>

出版情報 : 国立大学図書館協議会ニュース. 70, pp.16-26, 2003-11
バージョン :
権利関係 :

図書館が変われば大学は変わる

九州大学附属図書館長

有川 節夫

1. はじめに

ご紹介いただきました九州大学の有川でございます。国大図協の50周年記念総会におきまして、こういうお話をさせていただきますことを、非常に光榮に存じます。また直前には、雨森さんに国あるいは国大図協の全体に関わる高い立場から、これまでの数々の輝かしい実績に基づいたお話を聞かせていただきありがとうございました。

その後ですので、非常に緊張してお話をさせていただいています。実はただ今ご紹介いただきましたように、私は平成10年に思いがけなく図書館長に選ばれてしまいました。従って、館長としての心構えもほとんどなく、また当時の事務部長さん達も、まさか私が選ばれるとは思っていなかったでしょうから、必ずしも対応が好ましくないところもあったように思っています。(笑)

私は、その2年ほど前まで大型計算機センター長をやっていたのですが、センター長に選ばれた時には、直ちにセンターの事務長が飛んで来まして「よろしく」といわれ、選挙の翌日からセンター長気分仕事をさせられました。それは4月早々に概算要求その他がありますから、非常に大事な時期だからなのです。図書館の時間は、今の雨森さんのお話と、ちょっとギャップがあり、少しゆったりした感じで流れていまして、「そのうち来るだろう」というような感じでした。私は、大型センターでの経験から、非常に心配でした。大事な概算要求とか、そういったことを4月早々に頑張らなくちゃいけないはずなのに、これで良いのかと思ったわけです。

このような状況ですので、図書館のことを自分のところで勉強するわけにもいかず、東大の大型計算機センター（現在の情報基盤センター）に今もいらっしゃる親しい先生に東大図書館を紹介してもらって訪ねて行きました。その時の館長が六本先生で、事務部長が雨森さんです。案内していただいたのが、今は京都で事務部長をしていらっしゃいます大埜さんです。このお三方が、実は私にとって大学図書館で仕事をする上での恩師でございます。特に大埜さんにはいつ会っても「先生」と、こういうふうに呼んでいるわけでございます。いろいろなことを教えていただきました。お昼までご馳走になりまして、非常に図書館人としての重要な一歩を踏み出すことができたと思っております。

今日は、「図書館が変われば大学が変わる」というタイトルでお話をさせていただくわけですが、このタイトルを示すだけで私の講演は終わってもいいと考えています。お伝えしたいことは、このフレーズを常に心に抱きながら、5年以上図書館長として活動してきましたが、その結果、就任当時に抱えていました多くの問題があらかた解決または解決へ向かって動き出したということであります。そういう意味で、ここにいらっしゃいます雨森先生、大埜先生への宿題の報告であるというふうにお考えいただいて結構だと思います。

2. 九州大学における課題・懸案

前置きが長くなりましたが、私は、平成10年2月にこのような状況で館長に選ばれ、4月1日発令され、4月2日には筑紫キャンパスに呼ばれ、「分館を是非とも作って欲しい。」という強い要請を受けました。4月4日には入学式で館長講話があり、まだ就任4日目なのに「図書館とはこういうものである。」という種類の話をしなければなりません。そういうこともあって、先程の東大での勉強も併せ、4月早々に館長として立ち上がっている状況を作っていたわけでございます。

スクリーンに緑色の文字で書いてあるのが大きな課題です。このように実に様々な面倒な問題がありました。これをいちいち読んでいますと、それだけで40分ぐらい掛かってしまいますので重要なところだけ説明いたします。

まず、「分館の設置」です。後で説明しますがこれはたいへんなことでした。それから「研究開発室」に関しましては、大型計算機センター長をやっていた時に、当時の図書館長に「是非そういったものを作らなきゃダメですよ」というようなことを進言させていただきました。その館長が平成8年に実現してくださったわけです。それを充実させることが問題でした。それからもう1つ、館長になった時に学内外のいろいろな人と会うのですが、図書館あるいは図書館職員に対するイメージが芳しくない。職員に対しては「暗い」とか「積極性がない」だとか、ろくなことは言われぬ。これは変えないと、根気のいる緻密な仕事をなさっているのに、それはあまりにも不当ではないかと思った次第です。

それから、「大学図書館情報」というのに「就任にあたって」という文章を書かせていただいておりますが、そこでも書いておりますように、私は、大学院時代に図書館職員の、いわゆるレファレンス関係の人に助けられたわけです。彼らがいてくれなかったら、今日こういうところに居なくて、もっと幸せな生活をしていたかも知れないというぐらいにお世話になりました。(笑) したがって、気持ちの中では図書館のすべての人に強い尊敬の気持ちと感謝の念がありまして、館長として働くことによって、そういった方々への恩返しも少しはしたいと思っていたわけでございます。

そして先程、学生用の図書、あるいはその他の図書資料の充実に関する国の施策として、非常にご苦労して頂いたというお話がありましたが、あるところからピタッと伸びが止まり、むしろ減少するということになってしまい、見るに見兼ねるというような状況が出ております。利用環境に関しても閲覧机ひとつにしても、配慮が感じられない。私は情報科学専攻でございますけれども、ネットワークや情報関連も非常にお粗末な状況にありました。一方で、これは比較的最近のことですけれども、一般市民へ開放なども関係機関から言われはじめました。

それから何より重大な問題は、財政基盤が非常に弱いということでした。これを何とかしなければならぬ。館長になって、私は3年の間に生涯下げるべき頭は全部下げたというぐらいに、総長や事務局長それから他の部局長さん達にお願いしてまいりました。館長は、地位は結構高ところに保証されているようですが図書館にはお金がないものですから、常に頭を下げるべきやならない。非常に辛い思いをし続けてきました。それから私どもの大学は移転をしますのです、新しい図書館の構成や設計の問題、それからいわゆる情報基盤センター等との連携の問題もあります。

3. 課題解決のための基本的な方針

こういった課題が本当に山積していたのですが、私はそれに対して1つずつ個別に取り組むということはしませんでした。それは、先程の雨森さんのお話の中にもあったかと思えますけれども、何か一貫した方針、理念を持ち、そこから論理的に導かれる必然的な帰結として個々の問題を捉えて、解を探していく、そういった取り組み方をすべきだと思っているからです。

そのひとつは、学生という視点です。これは大学でのコンセンサスを得る上で非常に重要ですし、それ以前に、日本の大学図書館が実際いちばん弱いところではないかというふうに思っています。大学では、通常「研究・教育」とか「教育・研究」とか言いますが、私は「学習・教育・研究」というふうに言うことにしました。このように「学習」ということを前に置くことによって、あらゆる話が新しい視点で展開していくわけであり、学生のこと、学習のことを大学で語る時に、「そんなものはどうでもいい」と言い切る人は誰一人いません。ここで、大学人としての一般的なコンセンサスが得られまして、そこから個々の話しに入っていくことができるわけです。

つまり、おおもとのところで「イエス」と認めてもらい、そこから演繹して、「イエス、イエス、イエス」と続けて行きますから、その帰結として、「金ちょうだい」というところまで来ても「ノー」とは言えないという仕組みです。それが一貫した方針と理念を持ち、必然的な帰結として解決策を導き出すということでございます。

そしてもうひとつ、今日のタイトルでございますが、これも常に意識していることで、図書館から大学改革をするのだ、という強い意識を持つということ、そしてそういう話をいろいろな機会をつかまえてすることが大事だと考えています。大学図書館というのは国立学校設置法で非常に高い地位が保証されていますが、実際の認識は必ずしもそうではありません。それを私は「復権」という言葉を時々使いますが、大学改革は図書館の復権のために非常に良い機会であるというふうにも考えています。

それから皆さんの特に大学人の話題の中心に常に図書館があるという状況を作ること、別な言い方をしますと話題になる図書館を目指してきました。信頼される明るい図書館・図書館職員になろうというようなことを基本的な方針としてイメージして、それをたえず意識しながらやってきました。

4. 大学図書館の理念・目標

しかし、一番参考になりましたのは、大学図書館基準です。これはまさに釈迦に説法でございますけれども、昭和27年に制定され、57年に改定されているわけでございます。私は迂闊にも、その最初のバージョンをごく最近まで見ていなかったのですが、改定とありますのでほんのちょっと手が加えられたものと思っていました。全然違いまして、昭和27年のものは「最低基準」を定めたもので、57年のものは「向上基準」を定めているわけでございます。したがって、今出ているのは昭和57年のものですが、非常に格調高く、今でも新鮮でございます。これが向上基準ですので、目標にしてきたわけですので、これをしっかり実現していれば、実に素晴らしい大学図書館ができてはいるはずで、ここには総論から図書館の機能・業務・職員・施設・設備、それから組織・管理運営・予算・相互協力、そういったことについてしっかり書いてあり、そして詳しい解説がセットになっています。これは当時、皆さんご覧になったと思いますけれども、もう一度解説と併せ

てご覧になることをお勧めいたします。

そして、実は、この中の「機能と業務」の冒頭に、以下の事項に関して改善するために研究開発機能を備えるべきであると書いてあるわけです。この辺にもうちょっとこだわるべきだったのではないかと考えています。職員に関しまして、専門職員を配置するというようなことなどもちゃんと書いてございます。それから館長のことも書いてありまして、今はどこでも教官がやっていますけれども、今言いました専門職員を以て充てることもできるというようなことも書いてあります。

5. 九州大学における理念・目標：中期目標・中期計画

こういったものをひとつの指針と言いますか、拠り所にしながら、また当然、学術審議会の建議、審議のまとめとか、そういった最近の電子図書館機能あるいは情報発信等に関する報告なども念頭に置きながら、様々なことに取り組んできました。一方で今進行中の法人化へ向けて、私どもの大学は目立った動きは実はしていませんが、前総長の時代から心の準備のようなことはしてきました。平成11年と12年にそれぞれの部局に関する長期目標や中期目標・中期計画のようなものを書いて出せというようなことがございました。

私は、それより前に図書館に関しては、これは北海道大学で教えていただいたことですが、事業報告・事業計画にともなった決算であり予算であるべきだと思い、また、ある種の経営感覚を持つ必要があると強く思っていましたので、総長からの指示に真面目に取り組みました。そして、このスクリーンにあります項目を中心にした目標・計画というものを掲げまして、年に2回、あるいは3回、4回開かれる商議委員会の度に配ります。その間に実現したものは反映させて改定します。したがって、次の商議委員会が開かれるまでの間に図書館として判断しなければいけないことは、この理念・目標・計画に沿った形で館長の判断でやってしまいます。そういう意味では独断と言われることもなく指導性を発揮しているともいえます。この中期目標・計画はホームページあるいは「大学図書館情報」などに書いておりますのでご覧いただければ幸いです。

理念ですが、ちょっと軟弱な文章で恐縮ですけども、3つのことを掲げております。一番下は先程言ったことです。まず学生にとって、学習と情報収集のために行かずにおれない、1日行かなかつたらどうも気持ちが悪い、そういったような雰囲気のある図書館にすべきだということです。理系の者が書いたおかしな文章ですので、文系の先生がもうちょっとかっこ良い文章にしてくださると思ったのですが、直していただけないものですから、このまま使っています。それから、研究者にとりましては、ネットワーク社会の恩恵を十分にエンジョイできるような機能的で充実した図書館でないといけないといったことを理念として掲げています。

6. 学習図書館機能の整備

学習図書館としての機能整備ですけど、これまで私どもの大学では、研究者である教官と大学院学生を重視してきていまして、先生方に聞きましても「研究のための資料はしっかり揃っているから、君たち図書館側で心配してもらわなくてもいい」と、こういうふうな返事が返ってくるわけですが、学部学生という視点から見たら実にお粗末です。学生用の図書の選定も研究者の観点からやりますから、体系的でないし、何より調和がとれてない。それから収書体制が確立されていないわけです。

そこで、先程申しあげました「学習・教育・研究」という視点で学部学生を重視し、学生が図書館で勉強する環境を整備する。これが大学改革の基本だと思います。学生がしっかり勉強して、卒業し、良い社会人になって、社会のいろいろなところで活躍し貢献すれば大学は評価されるわけであります。大学改革を叫ぶとき、公募などして良い先生をよその大学から持って来ようというわけですが、その持って来る人はどこで育つのか、自分のところでも育てなくてはいけないのではないのでしょうか。少なくとも国立大学の場合は、そういう使命があると私は思っております。したがって、自分のところの学生がしっかり勉強する、しかも図書館で勉強することがいちばん大事です。図書館で勉強することによって、明るい人間ができるでしょうし、何より、他の人の視線を少し意識しながら公的なところで集中して勉強するという習慣は個人にとっても大事です。図書館で同じ世代の者が真面目な形相で勉強しているのを見ますと、自分もしなければということになる。そういったことが今度はまた人に伝わってゆき良い循環が生まれるわけです。

いい加減な表現のようですけども、これがやはり基本だと思います。「学生が居るから大学だ」と思います。私の大学のある博多には山笠という威勢のいい夏祭りがあります。地元ではコマーシャルでも「山笠のあるけん博多たい」といいます。「学生のおるけん大学たい」ですね。(笑い)

それから先程、雨森さんのお話を聞いていましたら、ちょうど私どもが入学したころほとんど良い状況になってきて、学生用図書経費というのは非常に高い比率になっていたようです。記憶が定かでないのですが、私のころの年間授業料は7200円ぐらいだったと思います。1月分でなく1年分です。それに比べますと先程の数値というのは、きわめて大きいわけです。私はこの数年間、「入学金の1割を学生用図書経費に！」ということをお願いしています。これで九州大学の場合は年間1億3000万円くらいになります。これを学生が4年なら4年、2年なら2年、6年なら6年学ぶ間に必要な図書資料費に当てるのです。何故1割かという根拠はここではお話しませんが、非常に判り易い説得力のある数字ではあります。

また、これは初めて話すことですが、私は、情報理学専攻という教授5人、助教授5人という非常に小さな専攻(教室)にいますが、そこで教授・助教授1人年間5万円を学生用図書経費として出していただき、合計年間50万を図書館に移算して、自分達の情報関係の学生用図書を買ってもらっています。これをもう5年間続けていますが、先生方からは全然不満もなく、忘れていきますと若い助教授の先生から「今年はある、やらなくていいのですか」と、こんな感じになっています。これが10年も続きますと、その分野に関しては非常に充実したものになると思っています。こういう密かな試行・実験もやっています。

それから蔵書構築の基準、特に学生用図書の選書基準もしっかりしたものがないという状況でしたので、これを整備することもいたしました。

7. 学生の学習環境の整備

学生の学習環境の整備、先程言いました閲覧机等の整備です。学生は様々な目的を持って勉強するわけです。ちょっと目隠しになるものがあるだけで集中度は全然違います。大きな資料を広げなきゃいけない時もあるし、個室も欲しい。いろいろな目的で調査・学習をするユーザにちゃんと対応できなくてはいけないと思います。

それから2つ目にちょっと書いておきましたが、私は56か57歳のとき館長になったわ

けですけど、それまで 20 歳から 36、7 年間タバコを吸っておりました。図書館みたいなところで館長がタバコを吸うわけにいかないと思ひまして、黙って 1 年間禁煙を試してみました。非常に辛かったのですができました。そこで全館禁煙に踏み切りました。(笑) タバコを止めてみますと、これまで周りの人にどれだけ不愉快な思いをさせたかということが判ります。この会場は出てすぐのところ喫煙できるようになっていますので、休憩時間に外に出られない状況にあります、こういうことを図書館でもやっていたわけです。

開館時間延長とか、休日開館、情報基盤センターの援助を得ながら情報サロンを開設するとか、そういったことにも積極的に取り組んできました。

また、予算に関しましては、まず学生用参考図書に取り組みました。私は情報科学が専門ですが、参考図書のところを見ますと「情報処理ハンドブック」なんか、もう 4 版が出ているというのに、初版本がちゃんと置いてあるわけです。「最先端の分野でも歴史的な価値を重んじているのですね」とか「古いものが好きなのですね」と言われるほど情けない状況にありました。予算経理委員会と当時は言っていたと思いますが、そこで演説をしまして、別枠で学生用参考図書費をいただくことができました。その委員会に医学部の先生がいらっしゃったのですが、これは一回きりのカンフル注射と思って欲しいというようなことをいって認めていただいたわけです。しかし、1 回通れば、後は昨年につけて、ということになりますので、1 度手を付けておけば上手くいくわけです。(笑) 普通の学生用図書の整備も別枠で電子ジャーナル経費と抱き合わせ格好でスタートできました。

8. 分館の設置

分館の設置ですけども、これは筑紫地区という教職員学生で 1000 人弱が居るところのことです。研究院・学府、研究所等たくさんの部局がある所ですけども、昭和 54 年に開設されて 20 年間も分館を置かずに図書館に関しては放置された状況にありました。もちろん分館設置へ向けた努力は、その時代時代の館長や事務部長達がやってきたことにはなっているのですが、よく見ますと自分達で条件を整えておいでという、非常に冷たい扱いをしてきていたと聞いていいと思います。

今日は昔の話がいっぱい出ておりますが、おおもとは文部省の情報図書館課長からの通知という昭和 45 年のものがございまして、「分館を新たに作るのであれば、6 名の定員、そのうち 3 人は図書館職員を持って来なきゃダメだ」ということになっています。これは大昔のことで定員削減を繰り返しているから、半分ぐらいでいいのじゃないかと言ってみたのですが、それはちゃんと生きているということで、なかなかクリアできないわけです。ですから受益者負担で、自分のところで定員を探しておいでと、こういうことをいつてきたのだと思います。しかし、図書館がない状態で放置してきたのは図書館長の責任であり、非常に申しわけないとまず反省しまして、この解決に当たりました。

いろいろ試みてみましたが、問題はやはり図書館側にありました。図書館側が絶対にやるのだ、大きなキャンパスであっても図書館分館も無いようなものをキャンパスとは言わないのだというぐらいの姿勢が、図書館を大学の中核的教育研究の施設だという意識が本当にあるのであれば、必要だと思います。ちょうど私どもの石井事務部長がいらっしゃった頃の京都大学での宇治分館の例もありましたので、それを参考にしながらやったわけです。そして、訓令改正で設置していただき、来年 3 月には建物も完成することになっています。先程、私どもの服部の方から IC タグの話をしていただきました時、建物の広

さを 187 m² といっていました、約 1800 m² です。この分館の名誉のために言っておきます。
(笑) それから所蔵図書数は、だいたい 15 万冊ぐらいでございます。

9. 研究図書館機能の整備・充実

あまり時間がなくなってしまったのですが、次は研究図書館機能の整備・充実です。これは、普通は電子ジャーナル関係を言うのですが、紙媒体での伝統的な大型資料のこともやらなきゃいけない、いやむしろこちらの方を重視してやっています。これは最近では、間接経費がありますので、それをいくらか充当することにしています。それから、図書館の方も自分達で競争的資金を獲得する努力もしています。

まず、Web of Science を最初に導入しました。当時、熊本大学にいらっしゃった甲斐さん達を中心にして九州地区でやっていたトライアルがありましたので、これを何とか実現したいと考えました。それから先程言いました図書館を学内の人たちに注目してもらうためのひとつの手段として最初ということに拘ったわけです。そういった研究成果の評価に威力を発揮する二次資料は、主に研究戦略上必要なものです。そういうことを言いながら、本来はそっちの方で調達していただいて、図書館でサービスをしてくれないかと持って来ていただくべき種類のものだけでも、はじめてのことだから図書館側でやってあげますというようなスタンスで総長裁量経費をいただき導入しました。

10. 図書館機能の電子化

総合目録データベース、いわゆる遡及入力の問題ですけれども、これは非常にタフな問題で、文部科学省でも東大でも努力していただいていますけれども、なかなか予算が付かない。私どものところでもボーンとやっていますと 20 年から 25 年ぐらい掛かります。これは何とかしなければいけない。移転もありますので、所在さえ判らなくなったら大変なことになります。これはもう必死で頑張りまして、結局、年間 6000 万円×5 年ということで 3 億の予算を確保しました。今、そのプロジェクトの 4 年目でございます。順調に進んでいます。

この予算を獲得するまでにいろいろなことを試みました。イメージで目録データを取って、それを検索するというシステムも作りました。これは実は思いのほか効果がありまして、特に文学部の先生方に喜んでいただいています。「図書カードを繰るイメージがないと、どうも使い難い」といわれます。まさにそれができるのです。それから、NII の努力によりましてネットワークがどんどん速くなっています。そうすると放っておいても速く使い易いものになってくるのです。他の大学等から引き合いもきています。来年以降法人化するので、これで商売をさせていただこうと思っている程です。このシステムを通じて問題の重要性を理解してもらうことができ、先程いいました 6000 万円×5 年というお金が確保できたわけです。

11. 研究開発室の拡充

それから、研究開発室の充実。これは先程もちよつと言いましたけれども、かなり充実してきました。学内措置ですが評議会決定で設置され、しかも、5 年という期限付きです。5 年毎に更新をすることは、面倒で不愉快な思いもするのですが、そのことは意味がありまして、「評議会決定されているのですよ。だったら、お金はいただけるのでしょ。」

そういうことで、研究費を総長裁量経費等から貰ってくることに役立っています。図書館の内部でサッとやれば、気持ち良くはやれますが、お金は、自分達で作ったのだから自分達で調達しろ、ということになります。各研究課題は、先生方と図書館職員のペアでもって取り組んでいます。実に様々なテーマに取り組んでいて、多くの実績を上げていると思っております。先程のICタグ、それから図書カードのイメージ化等もこの研究開発室からの仕事でございます。もう少しちゃんと話したかったのですが、今日も話題になっていましたパスファインダーのような技術も新しい形のレファレンスサービスのツールとして研究しています。

12. 蔵書構築要綱等の制定

蔵書構築要綱は、昨年度だったでしょうか、皆様の大学の調査もさせていただきましたが、立派なものをお持ちの所もありますけど、九州大学も含めてそうではない所が相当ございました。なぜでしょう。図書館の人は外国の状況も含めて非常に良く勉強されているのに、なぜまともに取り組んでこなかったのでしょうか。答えは、自分達で使えるお金が無く、選書できる体制になっていなかったという点にあります。図書は主として先生方が研究費で買ったもので、図書館ではその面倒を見るだけという状況ですので、蔵書構築要項のようなものを一所懸命作ってみてもしょうがないということだったと思います。

私どもは、先程ちょっと言いましたように、直接、予算措置をいただき、それがある程度のまとまった額になりましたので、これが現実味を帯びることになったわけです。やはり、ちゃんとしたお金を貰っておかないと、まともなことはできない、そういった例だろうと思います。

13. 情報基盤センターとの連携

情報基盤センターとの連携は、非常に良い形で進んでおります。情報基盤センターというのはもともと九州大学のアイデアだったのですけれども、実現したのは東京大学の方が先でした。しかし、その1年のロスがあったために、かえって良い形で実現できたと思っております。

図書館側からは3名の職員を振り替えて、2つの掛を作ってもらい、ですから掛長が2人できまして、振り替え元のところに常駐するという形になっています。人事は図書館の方で行っています。違った組織間の関係を良い状態で維持し続けるというのは通常は非常に難しいわけですし、いろいろな仕掛けをしておく必要があります。

九州大学の情報基盤センターというのはリッチな構造をしています。電子図書館掛、電子情報サービス掛というのがありますが、これが図書館に関連したところでございます。時間がありませんので省略しますが、ネットワークとか電子的な資料等に関するものを、基盤センターとの関係でやるというふうになっています。私どもの中央図書館にいらっしゃいますと多数のパソコン類とか大きなスクリーンがありますが、ああいったものは図書館においてありますが図書館のものではございません。情報基盤センターのもので。したがって、トラブルがあったら情報基盤センターの人がすぐに飛んで来て対応してくれるわけです。もし図書館に移管したりすると図書館が自分で対応や修理をしなければいけないのですが、良い関係を保っていて、置かせてあげているということになっていますので、こういうことができるわけです。その辺にいい協力関係を作り維持するヒントが

あると考えています。

14. 国際交流と地域貢献

国際交流は、韓国のソウル大学校を皮切りに慶北大学校へと続き、現在は、台湾大学と進めています。台湾大学は調印式をするだけなのですが、例の SARS の問題が起り延期になっています。ソウル大学校と台湾大学は、昔の日本の帝大があった所ですが、当時の図書館、当時の日本という国が、あるいは大学が、図書館をいかに大事にしていたかということが非常に良く判ります。そういう意味でも、交流協定は価値があったと思っております。

台湾大学は、実に堂々たる図書館を持っています。これは大学における図書館の文字通りの位置付けがしっかりしていることを示している良い例であると思います。また、ソウル大学校の場合には、現在は非常に良い状況になっていますが、日本との関係は必ずしもよくはなかった時期が長かったわけでして、そういう状況にあって帝大時代の図書資料をあれほどきちんと保存し、管理されていたということを実際に見まして、本当に鳥肌が立つような感動をおぼえました。図書館のあるべき姿を教えてくださいたいと思っています。具体的な活動のひとつとしてソウル大学校出版会と九州大学出版会との刊行物の相互交換も行い、新しい視点からの国際交流、大学の国際交流を進めています。

それから、市民への貸出や自治体の総合図書館との間の協定も結んでいます。

15. 自己点検評価

自己点検評価もしっかりやっています。この中でいちばん大事なことは外部評価です。外部評価というのは学外者による評価のことで、普通は大学全体や部局でなさるのですが、本学の図書館の場合には学内の主だったユーザ（大きな部局の部局長）にも外部評価者として加わっていただきました。これは図書館活動に注目していただき、強い味方が得られるという意味で効果的でした。その報告書のサブタイトルには「学習・教育・研究の基盤」という言葉を使っております。

16. 財政基盤の確立

時間がなくなってきましたので、財政基盤の確立の話に入ります。昨年までの間にこのスクリーンに示したようにいろいろなことをやってきました。だいたいのお話はこれまでにいろんな機会に話をさせていただきました。下から3番目に「経常的経費の増額」というのがあります。これは昔の学生当り・教官当りの積算校費の1.76パーセントでした。館長を引き受ける時に前任者から30分間だけの引継があり、あまりの短さにびっくりしましたが、その時に言われたのが、「この1.76パーセントを、お前は1.80パーセントにしろ。それができたら上出来だ」という感じのことでした。これをとりあえず2.29パーセントにしました。そして、ここにありますように実に様々な項目で図書館のためにお金をいただいてきました。

今年は、電子ジャーナルに関してかなり頑張りました。最終的には今年まではダメで、わかっただけなのは来年度になるだろうと思っていたのですが、意外にも今年、理解していただけました。そして、そのプロセスで、いたるところに図書館関連の経費があるものですから、これは私どもがお願いできることではないのですけれども、経理部の方が

図書館経費としてのそれらを括ってくれました。結局、平成12年から教育研究基盤校費となっておりますけれども、その6.97パーセントになりました。さっきの1.76パーセントから見ますと非常に大きな比率になっていて、これを率で固定するという事になっていきます。したがって、全体の基盤校費が上がれば、自動的に増えるという構造になっています。もちろん減った時にどうするかという問題はあります。

その中身はそこに書いていますが、まず、電子ジャーナル経費。これは私どもが要求した額通りにはなっていないところがありまして、図書館側で様々な努力をしなければなりません。これは額で固定ということになっています。また、遡及入力経費がありますが、これは来年で終わりますので、それ以降は全体として運用でき、非常に上手く働くのではないかと密かに期待しています。

それから間接経費。これはこれから申請することですが、昨年からはスタートしておりますので、それを大型研究資料の充実のために使うことにしています。次は、総長裁量経費。これは先程言いました評議会決定で設置されている研究開発室の経費や緊急を要する臨時的経費、試行のために必要な経費をお願いしています。いい理解が得られていると思っています。

17. これから取り組むべき課題

これから取り組むべき課題もたくさんあります。資料の劣化対策、その中に例えばデジタル化とか、今日の研究発表にもありました高精細画像化もあります。メディアの変換もやっておかなければなりません。

図書館組織の機能化という課題もあります。これについては非常に進んだアイデアを持っているのですが、時間がありませんので今日は触れないことにします。いくつかの大学には図書館専門員というのがありますが、私は、それを図書館職員としての最高のポストにして、そのうちの適当な人が課長をやったり、部長をやったりする。こういう感じで捉えるのが非常に良いのではないかと思います。

それから、館長はもう名誉職ではない。私の場合はもともと名誉職として選ばれていないものですから、かなり営業マン的感覚で取り組んできました。もうひとつ大事なことは、館長が自己紹介の時に「まったく素人でございますが」と謙遜していわれますが、これを言ったらダメです。選ばれたらサッと密かに勉強して、辞令をもらった日から素人などと甘えたことは言わない。これが非常に大事ではないかと思えます。

それから、先ほどちょっと言いかけてました図書館専門員とかサブジェクト・ライブラリアンがなぜ大事かといいますと、これはショックだったのですが、ある司書派遣の、いわゆるアウトソーシングのホームページがありまして、請負業務例の中に大学図書館でやっているほとんどすべてのことが入っているのです。入っていないのは国大図協関係の仕事だけですね。(笑) そのうち、それも入るかも知れません。そういう状況にあることをしっかり理解し、認識した上で図書館の専門性をしっかり高めておく必要があると思っています。

18. おわりに

大事なことがまだいくつかあります。まず、開かれた大学図書館とか一般市民への開放とかいう問題です。自分達の大学図書館がどうなっているのか、しっかり考えて対応しな

ければ危ないと思います。多くの大学図書館は構造的に問題があり、ユーザや職員に対する基本的な安全性が確保できないという問題があります。これをしっかり認識しておかないといけません。サービスや危機管理も含めたしっかりしたマニュアルを作っておく必要があると思います。

もうひとつは、今日のタイトルに関係することですが、学生が図書館で学習をしっかりするようになれば、大学に対する評価が変わるということです。大学改革を叫ぶとき、あるいは大学をやっつける時の説得力のあるデータとして良く使われるものに、スイスにあるIMD、国際経営開発研究所発行の年鑑があります。例えば、2000年版ですけれども、日本の大学教育は47ヶ国中47位ということになっているそうです。どういう質問だったのかということ、日本工学アカデミー顧問の堀先生がいろいろと調べて書いておられますが、それによりますと、「あなたの国の大学教育は競争的経済ニーズに合っているか？」といった種類のものであったようです。そして、答えたのはミドルマネジメントと言いますか、産業界・実業界のトップ、あるいはマネジメントをやっている人たちです。この人達が、日本の大学は全然なっていない、つまらない、役に立たない、という風を感じていたということになります。この人達はおそらく日本の大学ではほとんど勉強をしなかったのではないかと思います。企業に入ってから勉強し、アメリカなりヨーロッパなりに留学し、その時には、モチベーションが上がっていますからしっかり勉強されたのではないかと思います。日本の大学では勉強していない、特に図書館では勉強していないでしょうから、日本の大学は何の役にも立たないという答えになってしまったのではないかと穿った考え方をしています。もししっかり勉強されていたら、今日自分があるのは大学のせいだと思われるでしょう。そして、主に図書館で勉強されていたら、今日自分があるのは図書館のせいだ。こういうふうになると思います。そうすると大学の評価が変わってくるわけです。時間が無いから短絡していますけれども、基本的にはそういったことだろうと思います。今日の懇親会の時に、もうちょっとつながり良くなるように考えていただければと思います。

繰り返しますが、「図書館が変われば大学が変わる」のだという意識を持ちながら図書館の仕事をやっていくといったことが大事です。掲げましたタイトルを私自身は真理だと思っています。タイトルを事務局に届けました時に、「図書館が変われば大学が変わる。」ということで丸(○)を付けていたら「丸は取れ」といわれました。本当は丸を付けておきたかったのです。そうでないと、びっくりマーク(!)を付けられたり、クエスションマーク(?)を付けられたりする可能性がありますので。事実を表す平叙文というつもりでいたのです。別な単純なロジックのお遊びをしますと、「図書館が変われば大学は変わる」の対偶をとれば、「大学が変わらないから図書館が変わらないのだ」ということにもなりますが、それはそれで大学側にお願いする時には、使えるかもしれません。

そういった意識で、まじめに取り組んできますとこの程度の成果は上がります、といった報告でございました。ありがとうございました。